
俺が女であいつは

夏川逢樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が女であいつは

【Nコード】

N9366C

【作者名】

夏川逢樹

【あらすじ】

小さい頃から女の子らしく育てられた夏樹^{なつき}。親友の海美^{みみ}と新学期学校へ。学校帰りに夏樹に思わぬハプニングが！！それで前世の記憶が蘇るのだが…！！？

男女誕生！??（前書き）

出来れば最後まで読んでください！

男女誕生！??

「大変です！」

「どうしたんだ、騒々しい…」

「そ、それが、ナンバー933のあま天人が……！」

「ナンバー933は今日現世へ行く予定であろう？それがどうした。」

「はいっ、それが実は……。」

あたしは小さい頃から、バレエ、ダンス、ピアノ、バイオリン…と、女の子らしい習い事しかやった事がない。

小さい時に一度だけ、バスケがしたいと言ったことがある。そしたらお母さんは、「あのスポーツは男の子がするものなのよ」と言った。

友達のマキはやってるのにズルイって思ったけど、あの時はそれ以上言えなかった。

それだけじゃない。

あたしが、青の壁紙が良いって言ったら、「青は男の子の色よ、女の子はピンクなのよ」って壁紙はピンクになった。

確かそれが4歳の頃の話。あれから10年…あたしは“女道”を歩んできた。

何であたしばかり……って思う時もあったけど…今じゃもう、すっかり慣れちゃった。

中学は男女共学の公立中学校に入った。本当は私立の女子中に入らせそうだったんだけど、あたしが受験に失敗したから入らずにすんだ。あの時は泣いたけど、今は共学に入って良かったと思ってる。だって好きな男子もできたし、あっちもあたしに気があるみたい。

友達も沢山いるし、本当幸せ！！！！

「夏樹^{なつき}ー、海ちゃん来てるわよー！」

「はぁーい！」

タタタつと階段を駆け下りる。

ドアに手を掛け大声で叫ぶ。

「じゃっ、行つてきまーす！」

「行つてらっしゃい、気をつけてね。」

外に出ると、今日は雲一つ無い良い天気。

「んーっ！」

思いつきのびをする。

くすくすつ、と横で笑い声がする。パツと顔を向けると海が笑つてた。

「夏樹、年寄り臭い……！」

「えー、だって今日の空が綺麗すぎなんだもんつ。」

「何それ。」

言いながらまた笑つてる。

海の本名は、錦戸海^{にしきとみ}美。だけどあたしは小さい頃から海って呼んでる。

海は、背中まで伸びた長い髪を下ろしている。小6まで水泳を習つてたせいで髪は胡桃色をしている。アイドルです、って言えばそれで信じてもらえそうな可愛い顔。女のあたしでもドキッてしちゃいそう。

「夏樹ー？聞いてたー？！」

「え、ごめん。もう一回言つてー！」

「もー！」

ぷうっとほっぺを膨らませぶーぶー言ってる海。

「あのねっ、今日からあたし達中3でしょっ！だから、もう先輩も居ないし清々できるよねっ。」

「えー！海、先輩の事そう思ってたんだ…。今日メールしておこう。」

「あ、冗談だよー！ねっ、ねっ？！だからメールしちゃ嫌あゝゝゝ！」

本気で頼む海。もー、焦りすぎだよ。

「嘘だよー、からかっただけ。」

「ひどっ！」

あー、もう本当にからかいようのある子だよ。

「クラス同じだと良いねー。」

急に話題を変えて海に振ると…

「え？！あ、そうだね。うん、また4人が良いな。」

「あたしと、海、すーに未代！！」

あたし達4人は、1年の時から同じクラス。それもすごく仲良し。

そんな、新しいクラスの事を話していたらもう学校。

「あー、同じクラスですよにつ！」

もうクラスは決まっているのに、お祈りする海。

「何か、こういうのって緊張するゝ。」

校門から学校に入ると新しいクラス名簿が配られていた。

「おはよう。はい、これ。」

先生から紙を受け取り、自分の名前を探す。

「……………あ、あつた！あたし4組だ。海は？！」

「…あたし…3組。クラス別々になっちゃったね。」

「えー！ー！ー！そんなあ。中学校最後のなにゝゝ！」

「本当にがっかり…。」

2人で文句を言いながらそれぞれの教室に入った。

「あつ！ー！ー！夏樹ー！」

「え？すー！？何で？？」

「ひどーい！クラス名簿見てないの？一緒のクラスなんだよゝ！」

「えー、やったー！」

海と違うクラスでがっかりして同じクラスの人見てなかった。よく見れば、1年の時に同じクラスだった人が多い。

「未代は海と同じ3組になったんだよ！」

「そうなんだー！じゃあ、2対2に別れたね。」

「そうなんだよ。しかも、あつちは姫で、こっちはヤローみたいな。」

海はアイドル並にかわいい。けど、未代は赤い淵のめがねが似合う、いわゆる萌え仔。

それに比べ、昔から女の子らしく育てられたのにあたしはどうも男っぽい。最近髪を肩まで切ったらますます男っぽくなった。

すーは外見は女の子らしいのに喋り方は男みたい。

「やだねー、それ。せめて男女にしてほしかったよー！」

「そーだな！ははっ。」

「海ー！3組終わったー？」

「うん。今行くねっ。」

海はクラスの子ともう仲良くなったみたい。皆が、えーもう帰るのー？なんて言ってる。

「さっ、帰ろう！未代とすーは、一緒に帰った？」

「うん。さっきね。2人は空手あるんだって。」

2人は小2から空手を習っている。あんなかわいい顔して空手できるって、絶対身を守るためだね…。

「夏樹のクラスはどう、楽しい？」

「うん。楽しいよー！皆よく喋るし、それに今日なんてねー…」

その時だった。あたしの耳に一言：「危ないっ！！」って聞こえた。え？って思ったらもう手遅れ。

ガンッ！！！！

「~~~~ッ！！？」

あたしは海の方を向いて話していて気付かなかったんだ。
電柱に。

あたしは思い切りそれにぶつかった。

「大丈夫!？」

「…うん……。」

頭がガンガンする。

その後あたしは海に支えてもらい家に帰った。

すぐにベットにもぐり込んだ。頭がガンガンする……。

その後あたしは深い眠りについた。

『いいですか……？あなたはとてもまれにみるケースなのですよ？本来ならば現世へなんてもつての他！それをお許し頂けたのですから、感謝しなさい。』

『そうですよ！私達も出来るだけのことはしますから。母親は女を心から欲しがっている者にしておきます。』

『何せ、現世で男だったあなたが女に生まれ変わるなんて……通常は、女は女に。男は男に生まれ変わるんですからね。』

『そうだ。万一、前世の記憶が蘇りでもしたら……。我々は現世には行くことが出来ぬから、お前がどうかせんといかんから……。』

目が覚めた。変な夢だ。俺は伸びをして1階に下りた。
洗面所で顔を洗おう……。

「えっ……？」

鏡に映っているのは見慣れたいつもの顔……なのに俺じゃない。
水がゴーツと流れるように記憶が俺の頭で渦を巻く。

「そうだ俺、生まれ変わったんだ……。」

夢だと思っただのは天国での会話。

あの時俺は女に生まれ変わろうとしていた。でもそんな事は珍しいから管理長に呼ばれた。注意を受けて女に生まれ変わった俺。

「俺は夏樹…。女。」

言い聞かせるように言ってみた。

前世の記憶が戻った今、俺は女だけど男でもある…。

一体、俺の性別はどっちなんだ！！！！？

男女誕生！??（後書き）

コメントを出来れば下さい。

これからが面白いので楽しみにして待っていてください。

新しい生活??！（前書き）

フツツな毎日を送っていた夏樹。

ある日、ひょんなことで前世の記憶が蘇ってしまふ。

一体夏樹これからどうなるの?!

新しい生活??!

「た、大変です!!」

「うん?どうした。」

「14年前の、ナンバー933をお覚えですか?」

「ああ、確か男なのに女に生まれ変わる事になってしまった坊やであろう?」

「はい…。実はそのナンバー933は、夏樹という名前の女に生まれ変わったんです。」

「ふむ…。で、その娘がどうしたのか?」

「それが…。つい先程男だった時の記憶を思い出したそうです!」

「な、なんと…!!」

「ど、どうでしょう?!」

「これは面倒な事になった…。」

俺はずっと考えた。

今の状況を整理してみた。

俺はついさっきまで、女の「夏樹」だった。それが、(多分)電柱に思いつ切りぶつかったせいで前世の男だった記憶を思い出してしまった。

現在の俺は女。けど、前世が男だったから記憶を思い出した俺の精神は男だ。

つまりは、男女おとこおんなになったって訳。

あ、でも、前世の記憶を思い出したからって精神が女だった頃の記憶は有る。

うゝん…複雑。

「夏樹ー！朝ご飯できたわよ。」

「はい！」

…ん？……

無意識のうちに答えていた。そっか、昨日は考えてたら眠っちゃったんだ。

「んゝゝゝ！！！」

大きくのびをして制服に手を伸ばす。

「えっ！？」

手を伸ばした先にあつたのは…セーラー服！？

「あっ、そうか。」

思わず声に出た。だって、俺の前世は男だぜ？そりゃ、びっくりするさ。

「夏樹ー？早くしないと冷めるわよー。」

下から母さんが叫ぶ。

「はぁーい。今行くー！」

急いで制服に着替える。

流石にスカートには抵抗あつたけど、穿けば違和感なしっ！

ま、一応女だしね。

タタタつ。階段を駆け下りる。

「はよゝー！！朝ごはん何？」

はあゝ。とあくびをしながらリビングに入る。

「おはよう。…ひどい寝癖よ？先に直して来なさい。」

「え？そうかな。」

髪を片手で触ってみる。

ん！！ボンバー！！洗面所に直行する。

「うへへ。ひどい髪型だー！」

鏡を見たら、全部の髪の毛が好きな方向を向いていた。

「中々直らない…。」

俺は髪と格闘！！んーって悩んでやつと真っ直ぐに直った。

「ふんふん」

鼻歌を歌いながらリビングに向かう。

「おいひひー！最高だよー。」

ん？リビングで聞こえる可愛い声。絶対母さんじゃないな。リビングに入るとそこには…。

「ん！おはよつ、夏樹。ご飯頂いてまーす。」

「え？海…？何で居るの。」

本当に驚き！何で家に海が居るの？！

「今日は早く家を出てきたの。そしたらおばさんがご飯食べてき
なつて。夏樹、あたしが入って来たの気付かなかった？」

俺は髪を直すのに必死で、全然海に気付かなかったんだ。

「そーか！んじゃあ、一緒に食べっかなー！」

「えへ？！何、その喋り方。変だよ！」

あ、つい男言葉になった。ヤバイー！！

「そ、そうかな？朝だからちよつと…ね？変になるみたいな。」

「ふん。それならいいけど。」

何とかごまかした。これから気を付けないとな。

「ちよつと！！まだ2人共居るの？！もう8時よ、いいの？」

「えー！！！！！」

思わず2人でハモった。

「海、行こう！」

「うん！！！」

鞆を持って、ご飯も食べずに玄関にダッシュ！

「ご馳走様ー！行ってきました。」

海が先に外に出る。

「行ってきます！」

「行つてらっしゃい。2人共気をつけてね。」
扉が静かに閉じた。

「うゝ。腹が…。」

さつきから俺の腹は鳴りっぱなし。

「なゝつきっ!!」

「あ、すーじゃん。」

「ぐゝゝゝ」

あ…、腹が…。

「え、今のつてもしや夏樹だったりする？」

「あ、ははゝ。今日朝抜いたんだよ。そしたらもう鳴りっぱなしで…。」

やー、流石に今のは恥ずかしい。しかも俺は女なのに。

「え?!朝食べてないの？」

「うん。」

すーはびっくりした顔で俺を見る。すーが男っぽくて良かったなーなんて思うよ。

これかもし海や未代だったら俺の顔は真っ赤だったろうな…。

「夏樹、これ…。」

そう言つてすーが俺にこそつとあるものを渡した。

「えっ、これ…。」

俺がすーから受け取った物は、チョコレートだった。

「こんなじゃあ腹の足しにもならないけどねゝ。」

「そんなこと無い!すっげー嬉しい。」

すーって優しいな。こんな時に友達の有難みを知る俺。

「夏樹、今日は何か違うね…。話し方男っぽいよ。」

ぎくっ！男っぽいすーにまで言われるなんてね。

「そっ、そう？きつと何にも食べてないからだよ。」

精一杯女の子らしく返事をする、すーは「ふん」とどうでもよさそうに返事をした。

放課後、海と一緒に帰ろうと思い（と言うより約束している）組の教室へ向かった。

海のクラスはまだ先生がぺらぺらと何か話していた。

仕方ない、廊下で待つか…とか思っていたら、「おっす」って声をかけられた。

「え？」って振り向くと。

「何か久しぶりだな。」

「と、智樹……？！！」

新しい生活??！（後書き）

どうも読んでくださりありーです。

できれば感想下さいッ。

次回は急転回を迎えます!!（あ、でもまだ終わらんよ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9366c/>

俺が女であいつは

2010年10月17日02時50分発行